

東都フォルダー工業(株)

栃木県佐野市 (株)ベネック関東支店

RAPIDEによる生産性向上と現場のチーム力 定時に終わる計画生産が可能に

(株)ベネック（本社・埼玉県さいたま市、山田修代表取締役社長）関東支店では昨年、東都フォルダー工業(株)のシート専用コーナーレス投入機「RAPIDE（ラピード）」を導入。シート投入を省人省力化して、誰でも安定した生産ができるラインを構築するとともに、現場女性社員を管理者に登用する新しい組織による強い現場づくりに取り組んでいる。

最新設備と現場のチーム力で生産性向上を図る同支店（栃木県佐野市）を訪問して、小林正則支店長、新村登生生産課長・副工場長に話を伺った。

RAPIDEで省人省力&生産性向上

ベネック関東支店は、平成6年に開設されたホテルリネン工場で、同社が方針に掲げる高効率な機械運用の推進による生産性の向上と環境負荷の低減を一体化して行う生産体制が組まれている。連洗3本、ロール仕上げ（シート2、デュベカバー2、ピロー1、ユカタ1）6ライン等の設備により、8時間で38トンを生産している。

生産量は、とくに5～6年前から増加が続いており、同時に人手不足も深刻化しているが、その状況でも、最新設備の導入と計画的な生産の実行により残業なしの定時生産ができているという。



小林正則支店長



新村登生生産課長

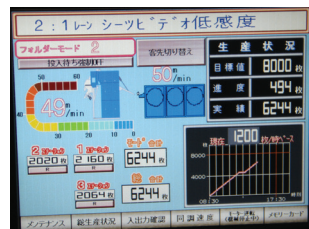


▲簡単作業とバッファ機能が好評のRAPIDE

なかでも、生産性向上と省人省力に貢献しているのが、昨年末に導入した東都フォルダー工業のシート投入機「RAPIDE」だ。

同機は、コーナーレス投入方式と投入機内にシートをバッファする新発想のシート専用コーナーレス投入機。作業は、シートのコーナーから50cm以上離れた一か所をクランプにセットするだけ。しかも、多少丸まった状態でセットしても展開可能で、投入作業の熟練度が生産性や品質に及ぼす割合は低くなり、入社したばかりの作業員でもその日のうちに戦力となる簡単作業とした。

また、シートを最大9枚まで投入機内部にストックできる機構「ビルトインバッファ」は、チョコ停ロス、投入待ちの解消や作業員の能力差による生産性の低下を解消し、新人でも高齢者でも安定して高い生産力を発揮できる。なお、現場での最適化は、ベテランの西宮顧問とメーカーが連携して作業に当たった。



▲時間1200枚ペースを表示するモニター

◀コーナーレスの投入作業は、簡単で新人でも安定した高生産が可能。バッファ機能も作業に余裕を生んでいる



▲RAPIDEの作業指導も行う生産課・小川真弓副主任

作業に余裕を生むビルトインバッファ

RAPIDE 導入により、投入は以前の4名から3名となり、生産性は1時間平均800枚だったものが1000～1100枚へとアップしたという。

新村課長は「ベテランよりむしろ新人のほうが早くコーナーレス投入に慣れてスピードが出たので担当に固定した。また、バッファ機能が作業に余裕を生んでおり、時間1000枚以上がムリなくできています」と語る。

RAPIDEのラインの生産性向上により、隣のラインの2時間分（約1600枚）のシートもRAPIDEに投入するようになり、余裕ができた同ラインではピローなどの生産を行うことで平準化と時短につながり、定時に終わる生産を実現。残業にかかるコストも削減している。

現場のベテラン女性社員を役職者に

生産性向上は、現場スタッフのモチベーションを高める結果にもつながった。「以前のように残業で、いつ終わるかわからない状況が毎日続いては個々のやる気も続かない。定時に終われるようになり、皆のモチベーションや生産に対する意識も高くなった」（新村課長）。

また、小林支店長は、「生産性向上の要因は機械設備だけでなく、作業員を育成する体制ができたのも大きい」とする。同工場は、生産にあたる70名のうち約7割が



▲5分配フォルダー「SS1A-N5-33」



▲デュベラインなど他の5ラインも東都のフィーダーが並ぶ

外国人の派遣従業員。単に作業方法を教えるだけでなく、高生産を求める指導は容易ではなさそうだが、同工場では現場のベテラン女性社員が、実際に作業をやって見せて、投入、検品などをどうすれば速く確実にできるかといった作業のコツを実践指導しているという。

この組織体制は、三川政男専務取締役の改善指導によりスタートし、現場で長年作業してきた女性社員を主任、副主任という役職に登用して各所に配置し、派遣従業員の指導にあたっている。

「各工程のリーダーという立場からランクを上げて、作業から離れて指導にあたってもらっている。我々のような管理職と違って、実際に投入などの作業を長年やってきた人たちなので指導も上手」（小林支店長）。

「外国人の場合、作業の説明を十分に理解できないとなかなか上達せず、やる気も低下してしまうが、副主任らが先輩の立場で作業をやって見せることで作業のコツを覚えている。投入担当はそれぞれ自分が生産した枚数を時間ごとに記録しているが、副主任らの指導により数字が上がっていった、それが仕事の達成感やモチベーションアップにもつながっている」（新村課長）。

こうして、長年の経験で作業をよく知る女性社員が現場のチーム力を高めている。また、その現場役職者と生産管理の役職者が密に連携しながら、現場の意見を取り入れた工場づくりが行われている。

やりがいを持って働ける職場づくり

今後について、新村課長は「作業にムリがあると品質、安全などが疎かになってしまうので、計画的でムリのない作業による高生産を追求したい。さらに生産性を高め、いずれは週に1回、半日でも稼働を止められる状態にして、機械のメンテナンスを行うことが目標」とした。

小林支店長は、「今後も皆がやりがいを持って働ける職場づくりを進め、ベネックに勤めてよかったと思うてくれる人を一人でも多く作りたい」と語った。